Mrs. Gaskellから見た Emily Brontëの肖像

芦　澤　久　江

Mrs. Gaskell が書いた *The Life of Charlotte Brontë*(1857) は発表当時、一般読者からだけではなく、批評家　G.H.Lewes や Charles Kingsley[1] などからたいへん高い評価を受け、賞賛された。

> The book will, I think, create a deep and permanent impression; for it not only presents a vivid picture of a life noble and sad, full of encouragement and health teaching, a lesson in duty and self-reliance; it also, thanks to its artistic power, makes us familiar inmates of an interior so strange, so original in its individual elements and so picturesque in its externals − it paints for us at once the psychological drama and the scenic accessories with so much vividness − that fiction has nothing more wild, touching, and heart − strengthening to place above it.[2]

The Life of Charlotte Brontë は人々の心をひきつけて離さず、読者は *Jane Eyre* だけでなく、Charlotte の生涯にも魅了されることになった。このように伝記もまた、小説と同じように、人々を魅了したのは、Charlotte の生涯が小説という名に値するほど dramatic で運命的であったからでは決してない。Charlotte 自身が「一日を説明すると、すべての日を述べることになります。」[3] と語っているように、それは、波瀾万丈というよりむしろ平凡な日々の繰り返しであった。それを感動的な作品に仕上げたのは、Mrs. Gaskell の作家としてのすばらしい手腕によってであったことはいうまでもない。[4]

このような人々の心を打つ伝記を書き上げるには、Charlotte が書き残した多くの手紙や、彼女とともに過ごした召使の証言、あるいは友人 Ellen Nussey

や Mary Taylor の証言、さらには Charlotte 自身の証言など、多くの資料から episode を厳選し、構成するという能力が必要とされたであろう。また巧みな描写によって読者を感動させる手腕も重要であったであろう。 Gaskell はどのように描けば人々が感動するか、という作家的奥義を心得ていて、それを遺憾なく発揮したのである。しかし何よりも強く感じ取られるのは、作家として、親友として、深く Charlotte を Gaskell が理解していたことである。そして、その友情と理解によって Gaskell は Charlotte の全体像を読者の眼前に生き生きと浮かび上がらせることに成功したのだと思われる。

このようにして Gaskell が Charlotte の生涯を書くことによって、これまで知られていなかった Charlotte の生活が明らかにされていった。しかし Lewes の関心は Charlotte にのみとどまらず、Gaskell に宛てて彼は次のように書いている。

> Emily has a singular fascination for me — probably because I have a passion for lions and savage animals, and she was une bête fauve in power, splendour, and wilderness.[5]

人々の関心は Charlotte 以外に、妹 Emily や Anne へも広がり、Brontë 家全体が注目を浴びることになった。そしてそのような興味は作品と伝記の相互関連的研究へ発展していき、それぞれの作品に登場する人物や場所の model が解明され、Brontë 姉妹に対する理解が一層深まったのである。しかしながら Emily 像についてはまだ伝説化されて伝えられ、謎めいた部分が多い。

Gaskell が Charlotte を描く際、彼女は、Charlotte の友人、召使などの証言、あるいは Charlotte 自身の手紙など多くの資料を利用することができた。そのうえ、Gaskell にとって有利であったのは Charlotte と直接会い、しかも親友といえる間柄であったことであろう。直接対面し、表情やことば遣い、口調、人柄をじかに観察したことは Gaskell にとって非常に貴重なことであった。それとは対照的に、Emily には友人もなく、手紙もほとんど残されていない。さらに Gaskell は Emily に会ったことが一度もなかった。こうした事情のなかで数少ない資料をかき集め、未知の人 Emily を描くのはたいへん困難な作業であったにちがいない。このように Emily に関する情報がきわめて少なかったので、Gaskell は Charlotte の眼を通してでなければ Emily を描けなかったのである。この点が Gaskell の Emily 像が受けたもっとも厳しい制限であった。

しかもEmilyに関するほとんど唯一の情報源であったCharlotteは妹を愛するあまり、その不都合な点を隠したにちがいない。事実、GaskellがCharlotteから聞かされたEmilyについてのepisodeは、彼女の才能を高く評価させるものばかりであった。例えば、台所仕事と読書を両立させる聡明さ、[6] Brusselsでのフランス語の上達の速さ[7]などすべて、Emilyがいかに才能豊かな人間であったかを物語っている。Gaskellが収集したCharlotte以外の人々の証言はどうであったであろうか。Jenkins夫人はEmilyが「はい」、「いいえ」しか言わなかったと述べ、[8] またEllen NusseyはEmilyについて、背が高く、腕の長い少女で、姉より極端に控えめだったと語っている。[9] Brusselsへ行く途中のEmilyの様子をMary Taylorは、無口だが、いつも意見はもっていて、決して姉の意見によって変えようとしなかった、と述べている。[10] Emilyに対する彼女たちのこれらの印象はおおよそCharlotteが語るEmily像とは異なっている。Charlotte以外の人々はほとんど、Emilyが極端に口数が少ない人であったので、あまり快く思っていなかった。しかしHeger氏はそういう人たちとはまた違い、Emilyの才能を讃美し、「男に生まれたら大航海者となったであろう」[11] と語ったといわれている。しかしこのHeger氏の意見にしても、Muriel Sparkが述べているように、Emilyが大作家として名声を得てからのことであるので、信憑性に乏しい。[12] Gaskell自身が収集したこれらの情報は彼女にEmilyの印象を固定させることになった。その印象とはよいものではなく、Gaskellに不快を感じさせるようなものであったのである。

GaskellはEmilyについて取材を進めていくにつれ、Charlotteの描くEmily像と、人々が語るそれとは異なることに気づき、次のように述べている。

> The character of Shirley herself is Charlotte's representation of Emily. I mention this because all that I, a stranger, have been able to learn about her has not tended to give either me, or my readers, a pleasant impression of her.[13]

さらにGaskellはAnneと比較して、Emilyを次のように述べている。

> I distinguish reserve form shyness, because I imagine shyness would please, if it knew how; whereas reserve is indifferent whether it pleases or not. Anne, like her elder sister, was shy; Emily was reserved.[14]

このような印象をなぜ Gaskell はもつに至ったのであろうか。わたしは、Emily の死に対する態度が Gaskell に決定的に好ましくない印象を与えたのではないかと思う。そこで Gaskell の描く Emily 像のもっとも重要な部分として、Emily の死の場面を考察してみたい。

Emily にまつわる episode のなかで人々がもっとも興味をもったのは、彼女の臨終についてであったであろう。なぜなら *Wuthering Heights* や彼女の詩作品のなかには死の image が頻出し、作品に色濃い影を落としているように、Gaskell が描いた Emily の死との闘いぶりはほとんど劇的でさえあり、強烈な衝撃を読者に与えるからである。Cecil Day Lewis は彼女の詩作品のなかに自由への欲求を読みとっているが、[15] Derek Stanford は Emily にとって自由とは独立であり、死であったと述べ、[16] Emily は死こそ永遠のものであると考え、憧れさえ抱いていた。それゆえ実人生において Emily がどのような態度で死に臨んだかについて人々が注目したのは当然のことである。

Gaskell はその場面を次のように描いている。

> The morning grew on to noon. Emilly was worse: She could only whisper in gasps. Now, when it was too late, she said to Charlotte, 'If you send for a doctor, I will see him now.' About two o'clock she died.[17]

この描写はまるで climax を迎える映画の one scene のようにみごとである。衰弱した Emily は喘ぎながら、これまで拒んできた医者に「今なら診てもらってもいいわ」というのであるが、すでに手遅れで、彼女はまもなく息をひきとった。ここには Emily の死に対する毅然とした stoic な態度が示されている。 そして人々は死に対してさえ動じなかった Emily の強い姿に、*Wuthering Heights* と同じように強烈な感動を呼び起こされるのである。

Emily に言及する批評家は必ずといってよいほど Emily の stoicism に触れてきた。Emily についての最初の本、*Emily Brontë* (1833) を書いた Mary Robinson[18]から、自殺説を主張する Virginia Moore[19] を経て、今日に至るまで、Emily の stoicism に言及するという伝統は続いている。これらの考え方は、特に Emily の死に臨んだ態度から heroism を読みとろうとするものであり、Emily の stoicism を死との壮絶な戦いと考え、その戦いのなかで名誉ある戦死を遂げた、とする見方に基づいている。そしてそれはすべて前述した Gaskell の描き方から出発していると思われる。

Yet, to the last, Emily adhered tenaciously to her habits of independence. She would suffer no one to assist her. Any effort to do so roused the old stern spirit.[20]

Gaskell は Emily のこのような精神の強靱さを紹介すると同時に、彼女を見守る周囲の人たちの様子も伝えている。

The servants looked on, and knew what the catching, rattling breath, and the glazing of the eye too surly foretold; but she kept at her work; and Charotte and Anne, though full of unspeakable dread, has still the faintest spark of hope.[21]

また Emily の死後、彼女の臨終の様子を回想し、身震いしながら話す Charlotte の姿も同じように Gaskell は描いている。

But Emily was growing rapidly worse. I remember Miss Brontë's shiver at recalling the pang she felt when, after having searched in the little hollows and sheltered crevices of the moors for a lingering spray of heather – just one spray, however withered – to take in to Emily, she saw that the flower was not recognised by the dim and indifferent eyes.[22]

Charlotte は家族のうちで Emily をいちばん信頼していた。幼い頃 Cowan Bridge や Low Head に送られたとき、Charlotte と一緒であったのは Emily であった。Anne は幼すぎて家に残されていたからである。Brussels へ留学する際に Charlotte が Emily に同行を求めたのは、彼女が Emily に深い信頼を寄せていた何よりの証拠である。たったひとりの男の子 Branwell は酒や阿片で身をもちくずしてしまっていたし、Anne は、忍耐強い妹であったけれども、Emily 以上の信頼感は与えなかった。不幸続きの家族のなかで、Charlotte は彼女自身を支える力強さを Emily 以外の者に求めることができなかった。それゆえ、Emily の死は Charlotte にとって Maria や Elizabeth の死以上につらいものであったのである。[23]

一方、Gaskell は Emily の死を客観的に伝えるというより、Emily の死がもたらす周りの人々の、特に Charlotte の悲しみに深い共感を覚えていた。Emily は医者ばかりか、Charlotte や Anne の援助さえ拒否し、弱った体で

いつもの日課をこなそうとした。足許もおぼつかないEmilyを家族たちはなすすべもなく、ただ黙って見守るしかなかった。そのような周りの人々のどうすることもできない苦しみを、Gaskellは読者に切々と描いてみせた。なぜなら最愛の妹を亡くし、悲しみに打ちひしがれるCharlotteの様子が本人の口から語られるとき、Gaskellの憐憫をそそることになったからである。

しかしGaskellがCharlotteに同情をよせたのはそれだけの理由ではなかった。それは、Emilyのstoicな態度にあったのである。死に臨んでも毅然とした態度を取り続けたEmilyの姿は、すでに述べたように、Virginia Mooreをはじめ、多くの批評家の論争の的となったが、GaskellはこのEmilyの心を理解することができなかった。他人の助力を断じて介入させないEmilyの決意はGaskellにはあまりにも自己中心的なものとしか思えなかったのである。

加うるにCharlotteの心配や助言に耳さえ貸そうとしないEmilyにGaskellは反発さえ覚えていたのであろう。それゆえGaskellがEmilyのstoicな態度を描いているのは、Emilyの強靱な精神力に対する崇拝ではなく、むしろGaskellのCharlotteに対する同情であった。Gaskellの真意は、死に臨んだEmilyのstoicismを強調し、その死を壮絶なものとして表現することによって、Charlotteの苦しみと悲しみを著述の中心に据え、そこにpatheticな効果をあげようと意図して書かれたものだと思われる。

GaskellがEmilyの精神を理解できなかったということは、*Wuthering Heights*への言及をどちらかといえば避けたがっているふしがあることからも判断できる。

> In December 1847, *Wuthering Heights* and *Agnes Grey* appeared. The first named of these stories has revolted many readers by the power with which wicked and exceptional characters are depicted. Others, again, have felt the attraction of remarkable genius, even when displayed on grim and terrible criminals.[24]

Gaskellが*Wuthering Heights*について述べたのはこの部分だけである。Emilyについてもまた、彼女の作品についてもGaskellは共感を覚えることができなかったといわざるを得ない。

Emilyをどうしても受け入れることのできなかったGaskellはAnneの死については次のように描写している。

The progress of Anne's illness was slower than that of Emily's had been; and she was too unselfish to refuse trying means, from which, if she herself had little hope of benefit, her friends might hereafter derive a mournful satisfaction.[25]

この描写はいかにAnneが家族のことをきづかうやさしい人間であったかを示している。Anneにはつねに神の摂理のもと、いかなる苦難にも耐えていこうとする堅忍の精神があった。またキリスト教国のいかなる信者にも負けないくらい、りっぱな信仰者であったし、つねに家族を思い、死の床でさえも、Ellen NusseyにCharlotteの妹になってやってほしいと頼むやさしい姉思いの娘であった。

このようなAnneに対してGaskellは非常に好感をもち、近しい気もちを抱いたにちがいない。Anneの死に対する態度とEmilyのそれを比較しても、GaskellはEmillyがわがままな人間であるという結論を下さざるを得なかったのであろう。また次のようなCharlotteの手紙が一層Gaskellの同情心をよびおこすことになったのかもしれない。

There is some feeble consolation in thinking we are doing the very best that can be done. The agnoy forced total neglect is not now felt, as during Emily's illness.[26]

Branwellが死んで、後を追うようにEmilyが逝き、Charlotteに残されたのはAnneだけであった。その唯一の慰めであったAnneも旅立ってしまった。しかしCharlotteみずから述べているように、Anneの死はEmilyの死とは別種の悲しみをもたらした。Anneの死は、Charlotteの心を暗くはしたが、Emily の死ほどの激しい衝撃はなく、ある種の満足感を与えたのだ。なぜならCharlotteはAnneのためにしてあげられることはすべてしてあげることができたからである。AnneはCharlotteがさし出す薬を拒まなかった。またCharlotteはAnneの強い希望であったScarboroughへ彼女を連れて行くこともできた。

それに反して、Emilyの場合には、Charlotteは彼女のために何もすることができず、ただ見守ることしかできなかった。Emilyの死に比べれば、Anneの死はCharlotteの心をそれほど深く悩ませなかったのである。

「Emilyの寡黙な性質がわたしを悩ますのです」[27]と述べているように、Charlotte

は死の直前まですべてを拒否したEmilyの心の内を理解することができずに苦しんだ。また *Wuthering Heights* が発表されて不評をかったとき、自分のことのように心を悩ませ、妹をかばうつもりでコメントを述べた。しかしそれもEmilyをまったく理解していないことを露呈するものとなった。そのように理解することもできないほど、神秘的な大きさをもつEmilyの精神をCharlotteはしだいに英雄視するようになっていった。

それはEmily を model として描かれた *Shirley*の主人公 Shirley Keelder 像からも明らかである。妹 Emily の iron will を崇拝していた Charlotte は小説だけでなく、Gaskell に語るときもまた、Emily の stoicism を強調した。臨終の壮絶な戦いだけでなく、狂犬にかまれ、自ら火のしをあてた大胆な応急処置や禁を破った愛犬 Keeper の眼が見えなくなるほど殴り付け、そのあとでやさしく介抱してやったという不可思議な動物愛護など[28]、Emily に関する一連の episode は Charlotte の妹を崇拝する気もちから語り出されたものなのである。

しかし Emily を英雄崇拝するあまり、Charlotte が語ったこの stoicism の強調は、Gaskell には Charlotte が意図したままに映らなかった。Emily について Charlotte が熱をこめて話せば話すほど、Gaskell は Emily よりも Charlotte に熱っぽい同情をよせた。Emily に翻弄され、苦しむ Charlotte に Gaskell は哀れみをもつと同時に、傲慢な Emily に嫌悪を感じたにちがいない。

Gaskellがなぜこのような反応を示したかということをさらに考えてみると、彼女たち二人の生い立ちに深い関係があるように思われる。Gaskell の肉親の死と彼女の文学活動には密接な関連がある。[29] Gaskellを出産してまもなく、彼女の母親は亡くなり、彼女は伯母にひきとられた。また *Cranford* にも描かれているように、兄も行方不明となり、肉親は父親ひとりだけになるが、その父親も再婚の後亡くなった。Gaskell 自身は結婚し、幸せな日々を暮らしていたが、突然不幸が襲った。息子 William が猩紅熱にかかって亡くなったのだ。肉親の死を幼い頃から経験していた彼女は死というものについて考えることを避けられなかったであろう。罪のない人間がなぜ死ななければならないのか。そしてまた同時に死によって残される家族の深い悲しみも人一倍強く感じていたのである。それゆえ妹に先立たれた Charlotte の気持ちが痛いほどわかったのである。

前述したように、Charlotte と Gaskell は幼い頃から肉親の死を経験していたという点で生い立ちが似ているが、決定的に違っている点がある。それ

は肉親を亡くした後の二人の生き方である。Charlotte は Emily、Anne を失うと、その悲しみから立ち上がることができなかった。*Shirley* 執筆中に Emily が亡くなると、彼女の作品は勢いを無くし、失墜した。その後書かれた *Villette* も *Jane Eyre* のような激しい情熱はない。苦難を克服して生きることができなかったのだ。一方 Gaskell は息子を亡くしたことが原動力となって *Mary Barton* を書き上げた。彼女は Charlotte とは違い、悲しみを克服し、人間として、また作家として、大きさを増していったのである。

Gaskell は *Jane Eyre* を書いた作者にぜひ会いたいと熱望していたが、それは孤児 Jane のなかに Gaskell が自分自身の姿を見ていたからであろう。Charlotte の生い立ちと自分の生い立ちに重なり合う類似点のあることに気づき、いっそう親しみをまし、二人はお互いに identity を感じあい、強い絆で結ばれるようになったのである。しかしこの点がかえって Gaskell の Emily に対する理解を狭めてしまったのではないだろうか。Charlotte に同質性を感じ、同情すればするほど、Gaskell には Emily が異質なものに思えてならなかった。それゆえ Gaskell と Emily の間に Charlotte が立ちはだかり、Emily への接近を妨げたのである。

Charlotte を除くその他の人々の証言を総括しても、あるいは Emily の死に対する態度を考えてみても、Gaskell には Emily が自己主張の強い egoist としか映らず、Charlotte に対して同情すればするほど、Emily への理解が表面的なものにならざるを得なかった。しかしながら、Gaskell は決して自分の感情をむき出しにして、Emily を描くようなことはしなかった。Charlotte が愛し、崇拝する英雄としての Emily 像も、他の人々が Emily から受けていた印象も並列して書くことによって、Emily 像に幅をもたせようとしたのであろう。判断を読者に委ねようとしたのかもしれない。

今日さまざまな解釈が生まれているように、Gaskell が描いた Emily 像は多面的な側面をもっている。Gaskell が自分だけの色眼鏡で Emily Brontë が判断されないよう注意をはらったからである。そこに Gaskell の作家としての器量と、人間としての寛容さが証明されているのではないだろうか。また Charlotte に対する深い愛情の証とさえなっていると思われる。

Gaskell は Charlotte と 6 歳違いであった。年齢的に見れば、二人は姉妹であるが、Gaskell は Charlotte にとって母親のような存在であり、大地のような大きな懐で Charlotte を包んでいたにちがいない。そしてそれは Gaskell が描いた Charlotte 像や Emily 像のなかにも示されているのである。

Notes

1) *The Brontës, Critical Heritage,* edited by Milliam Allott (London : Routledge and Kegan Paul, 1974) p.343.
2) *Ibid.,* p.329.
3) Charlotte Brontë's letter to Ellen Nussey, July 21st, 1832.
4) Gaskellの文学的資質については山脇百合子著『ギャスケル研究』(北星堂書店, 1976)pp.43-66を参照のこと。
5) *Op.cit.,* p.330.
6) Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë,* The Haworth Edition (London : Smith Elder Co., 1900) p.139.
7) *Ibid.,* p.238.
8) *Ibid.,* p.221.
9) *Ibid.,* p.126.
10) *Ibid.,* p.220.
11) *Ibid.,* p.227.
12) Muriel Spark, *Emily Brontë* (London : Peter Owen Ltd., 1953) pp.14-15.
13) *Op.cit.,* p.414.
14) *Ibid.,* p.126.
15) Cf. Cecil Day Lewis, *Notable Images of Virtue* (Toronto : The Ryerson Press, 1954) pp.1-25.
16) Derek Stanford, *Emily Brontë*(London : Peter Owen Ltd., 1953) p.169.
17) *Op. cit.,* p.382.
18) Mary Robinson, *Emily Brontë*(London : W. H. Allen and Co.,1883)
19) Virginia Moore, *The Life and Eager Death of Emily Brontë*(London : Richard Cowan Ltd., 1953)
20) *Op.cit.,* p.382.
21) *Ibid.,* p.382.
22) *Ibid.,* p.381-2.
23) Winifred GérinはEmily Brontë (Oxford : Clarendon Press, 1971) pp. 9-10において、長女Mariaの死はEmilyに何も影響を及ぼさなかったが、Charlotteには大きな悲しみとなって心に残ったと述べている。またEllen NusseyはCharlotteがMariaを語るときはいつでも涙をためて語ったと述べている。Ellen Nussey, 'Reminiscences of Charlotte Brontë,' in

Scribners Monthly 2 (May, 1871), p.22.

24) *Op.cit.*, p.347.

25) *Ibid.*, p.400.

26) *Ibid.*, p.401.

27) Charlotte Brontë's letter to Ellen Nussey, Dec. 10th, 1848.

28) *Op.cit.*, pp.274-5.

29) Mrs. Gaskellの生い立ち、特に肉親の死は彼女の作品の材料となり、父親の兄弟であるJosephの死は*Cousin Phillis*に描かれている。